

## 10. 地頭町に対する意識：婚入女性を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 智久 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/4920">http://hdl.handle.net/2297/4920</a>

## 10. 地頭町に対する意識—婚入女性を中心に

内田智久

- I. はじめに
- II. 地頭町に対する思い
- III. これからの地頭町
- IV. おわりに

### I. はじめに

川端康成『雪国』の中に「トンネルを抜けると、そこは雪国だった」という文句があるが、富来町は初めて訪れたときにそれを思い起こさせる町だった。もちろん小説のように実際に雪があったわけではないが、能登有料道路を海を左手にみながら走っていき、山を越え、最後にトンネルを抜けると、まさにそこは富来町だったという印象がある。

こうした土地柄からか、人々は変に都会にすれたところがなく、お話を聞かせていただいたすべての方が温かい心の持ち主であった。しかし、その中で人々それぞれの富来（地頭町）に対する意識は少しずつ異なるものがあり、興味深く感じた。そこで本稿では、そういったデータに表れない地頭の人々の意識を、この町に嫁いできた女性を対象に行ったインタビューを元に論じてみようと思う。

### II. 地頭町に対する思い

#### 1. 昔と今の通婚圏の違い

富来町を小説の文句を引用して表現したが、その中でも地頭町は、かつては「マチ」として栄えていた名残を残し、のどかではあるが、どこか洒落っけのある町である。そんな地頭町にも様々な世代の女性が生活をしているわけで、子供の頃からこの町になれ親しんでいる人もいれば、最近嫁いで来て初めて地頭町を知ったという人もいる。町での年間の婚姻数は、近年の人口の減少、高齢化もあってか減少してきているが、その中で女性の通婚圏にも変化がみられ、現在50歳代の以上の女性は、門前や領家など比較的近辺から嫁いできた人が多いのに対し、30歳代から40歳代の女性のなかには、県外から嫁いできた人も目立つ。地頭町を離れていた男性が故郷に戻るときに、嫁も一緒に連れてくるというケースも、昔に比べると増えている。実際、今回話を聞いた人々も、年配の女性の多くは幼い頃から地頭町に馴染みがあり、比較的若い女性は、県外から嫁いで来た人が目立った。そして、昔と今とでは嫁のライフスタイルにも変化

がみられる。商家を例にあげると、上の世代の女性は地頭町の中での生活が大部分を占め、外と比べて地頭町をみるとしてもせいぜい農漁村と比べるくらいで、あまり地頭町以外のことを知らなかったが、下の世代の女性は、商家でも多くの嫁が地頭町から働きに行くなど、少なくとも「外の世界」を見る機会は増えている。それによって若い世代の人々は、年配の人より客観的な視点で地頭町をみるようになった。もちろんすべてがそうというわけではないが、話を聞いた多くの人の考えをその世代の意見として受けとめ、大きく分けてこの2つの世代の人々のこの町に対する思いをまとめてみた。

## 2. 嫁にきた人の位置づけ、立場

地頭町に嫁いできた現在30歳～40歳代の女性の出身地が県外に多いといったが、その理由の1つとしては、まず交通の便の改善が考えられる。かつては七海から山を越えて行くルートでしか金沢に行けなかったが、今ではバイパスもできて、人々の行動範囲も大幅に広がった。その結果、結婚相手の出身地も広範囲にわたるようになったと考えられよう。また、地頭町での結婚は基本的に今でもなお嫁入りであり、実際には女性が自分の独自の判断、選択として地頭町へくるというよりも、まず男性の高学歴化、就職による転出を経て、そこで出会った女性を嫁として戻ってくるケースが増えているのも、大きな理由の1つであろう。そして地頭町には、言わば新しい血が流れ込むようになった。

彼女たちの目に映った地頭町は、特に都会のほうから嫁いできた人にとって、非常に地域内のつながりが強く、悪く言えば内向的なものだった。Aさん（30歳代の女性）は東京から嫁いできたが、当時は、地頭町の細長い地形や、結婚式の引き出物の多さ、さらには地下鉄すらないことなどに驚き、最初は戸惑いの連続だったと言う。そして印象的だったのが、Aさんは古くからある家父長制的な空気を「冷たい」とすら感じていたということだ。世代を問わず、多くの人の口から耳にした言葉に「地頭町根性」というものがあるが、それはそもそもかつて農漁村の人々が、ダンナサマ気取りのマチ的な商家の人々に対して使った言葉であると思う。しかし彼女達にとっては、農漁村も地頭町も同じレベルでイナカであり、「冷たい」＝「地頭町根性」と受け止めてしまうのも自然なことである。いずれにせよそれが本来この町に備わっているものだとしても、通婚圏が今ほど広くはなかった時代においては、人々にそれ程深く実感させるものではなかったのではないだろうか。通婚圏が広がったことにより、また違った角度から地頭という町がみつめ直されたと言える。その地頭町根性は、ときに「封建的」とか「殿様的」といった表現をされるが、それは裏を返せば、地頭町のつながりの強さや中心地に住む町民としての誇りを表していることに他ならない。Aさんはまた、こうした感覚はある程度どの集落にも存在することであり、そう考えると、地頭町は日本の縮図とも言えるのでは、とも語っていた。

交通の便が良くなって変わったのは通婚圏だけではない。現在、地頭町は過疎化に悩まされ

ている。若者が町を出ていく率が年々増え、かつてはもどってきていた年に一度の祭りに際しても、今では人手不足に悩まされている状態である。若者が減っているということはそれだけ高齢者の割合が増えることを意味し、それもまた地頭町根性を強く感じさせる原因の1つを担っているだろう。

また、Bさん（40歳代の女性）が指摘したのは、地頭内における情報の速さだった。Bさんは生まれは地頭だが、県外で結婚し、その後地頭に戻ってきたという経歴の持ち主である。しばらく都会で生活していたため、地頭町の生活に再び戻ることは想像以上に困難なことだったとBさんは振り返る。結婚当時、町に慣れるために夫と共に様々な努力をしたが、その時気になったというよりも驚いたのは、町民の間を駆け巡る情報の速さだったという。例えば、ある日晩御飯のおかずが時間がなくて作れず、仕方なく近くのコンビニでおかずを買うと、次の日には多くの人がある事実を知っているらしい。これはもちろん大袈裟な表現だとは思うが、それでもBさんは「地頭の情報システムは、インターネット顔負けよ」と笑顔で語った。これは、地頭町内のつながりの強さを端的に示していると思う。Bさんも言っていたが、確かに地頭町に比べると都会は人も多く、モノも豊富にある。しかし、そんな中で人々は逆に人とのふれあいの場を失っていき、同じアパートに住んでいても、隣人と挨拶を交わさないどころか、どんな人物が住んでいるのかすら知らないような状況である。それに比べたら地頭町は、人は少ないがその分、人と人との間に太いパイプが生じ、人の温かさといったものを感じることができる。ただ、都会暮らしに慣れてきたBさんには、それは幼少時代には覚え得なかった感覚であり、少々戸惑いを覚えるものであったようだ。

よって彼女達にとって初めて来る地頭町、あるいは再び戻ってくる地頭町とは、最初は必ずしも居心地が良いものだったとは限らないといえる。地頭町の人々は人情味があふれ、素晴らしい人ばかりだが、そのことが逆に彼女達に、外からくる人々に対して異様に興味が強いと思わせたのかもしれない。「住めば都」と言う人もいたが、良い意味でも悪い意味でも人間関係に気使いが必要と言うのが一致した意見だろう。

### 3. 高齢者、昔嫁いできた女性

それなら、そういう若い世代の嫁に対して、もう少し年配の女性の人々は若い世代を、また地頭町をどのように思っているのだろうか。自分達の頃とは通婚圏も、地頭町自体の様子もかなり変化してきている中、今思うことは、一体どんなことだろうか。

富来町の特質としては、大工、漁師、船員が多く、その他は商業や農業に従事しているという点があげられる。中でも地頭町は「マチ」として栄えてきた。現在50歳代よりも上で、地頭町に嫁いできた女性の多くは七海や門前、領家など比較的近辺から出てきているが、彼女達は幼い頃から地頭町を間近にみているので、いざ嫁いできたときも若い世代が感じるほどの驚きはない。むしろ、当時「マチ」として栄えていた地頭町に憧れに近い感情を持っていた人

が多い。しかし、中には逆のことを思った人もおり、Cさん（1970年代前半に嫁いでくる）は門前出身だが、「聞いていたより田舎」と感じたと言う。当時門前から金沢に行くときは、まず穴水にいき、そこから電車で金沢まで行っていたので滅多に地頭町に寄ることはなく、「地頭は非常に栄えている」という噂だけが一人歩きしてしまったのかもしれない。さらに、地頭町の繁栄や格式の高さに対する反発があったのも事実で、農村部のこと「在郷」と言って差別化したり、奥能登の方から来ることを『「下」から来る』と表現したりする態度は、周辺の町の人々に「地頭町根性」を強く印象づけた。

しかし、その世代の人の多くが、地頭町に対して少なくとも若い世代よりも好意的に受け止めていたことは間違いない。里本江出身のDさん（50歳代の女性）も30年ほど前に地頭町に嫁いできて、第一印象は「栄えているなあ」だったという。今でこそ過疎に悩んではいるが、まだその当時は活気に溢れ、「マチ」としての威厳を保っていた。その威厳が、「旦那さま」の存在や「殿様商売」と呼ばれる仕事への態度と重なり合い、やがて地頭町根性とされていったのは言うまでもない。

もちろん、年配の女性の中にも、現在の地頭町の様子を寂しいと言う声も少なくない。昔よりはいい暮らしぶりになったと感じてはいるが、その変化も人によってとらえ方は様々である。観光に力を入れてはいるが、変化といえば、中学校が統合したり、役場その他の建物が移転したりしたくらいだ、と嘆く人もいる。こうして見てみると、上の世代と下の世代とでは時代の背景はまったく異なるものであり、町の人々と付き合っていく上での考え方もまた異なるものである。大まかに言えば、下の世代は物事を比較的冷静に見ているのに対し、上の世代はことさら地域のつながりを重要視し、そうした下の世代の態度を決して快くは思っていない。

### Ⅲ. これからの地頭町

以上に述べてきたように、地頭町の嫁の層は、その意識を取り上げた場合、大きく分けて上の年代と下の年代の2つに分類できる。この2つの年代は、同じ地頭町という地域に共存しながら、かなり違った考えをもっている。こうした相違が顕著に表れるのが、婦人会に代表される各種組織への対応である。

こうした組織に対する考え方は、2つの年代で大きく異なり、そのことが一部では活動内容を有名無実化している場合もある。Eさん（50歳代の女性）は、婦人会に積極的に参加し、そこで活動をするうちに地域の人々と交流を深めていった。そして、たとえ年齢差があっても、会で同じ活動をしていれば自然と話が合うし、相互理解にも一役買っていた。実際Eさんが嫁いできた頃は、そのようにして年配の女性と交流を深めることができたという。これはEさんだけに当てはまることではなく、少なくともその世代の嫁にはほとんど全員に当てはまること

だった。しかし、最近は若い女性の婦人会離れが進んできているという。いったん入会しても、役が回ってきそうになると辞めてしまうらしい。そんな状況なので、上の世代と下の世代が意見を交わす機会も減り、両者の意思の疎通ができなくなっている。

それでは若い女性のほうはどう思っているのだろうか。彼女達は、嫁いできたときにまずその「地頭町根性」に触れ、地頭町のつながりの強さを身に染みて実感する。そこでその輪の中に入っていきことができれば良いが、大抵の女性は一歩下がって距離を置き、そうすることによって他の世代の女性との交流を深める機会を失ってゆく。また、会費の使い道や活動内容に納得がいない人も多い。こうしてできた2つの世代の溝はどの様に埋めて行けば良いのだろうか。

#### IV. お わ り に

地頭町が抱える問題は他にもあると思うが、人と人とのつながりについてのこの問題は、以外に深刻なもののように感じた。こうした問題は、似たような地域ならある程度どこにでもある問題なのかもしれないし、解決策などというものもないのかもしれない。古くからある地頭町の独自性を守り続けることも確かに必要だが、マチ自体が変わらなければならないとするなら、町出身の男性と異なる、外から来た女性の視点もまた貴重なものになる可能性はある。

しかし、住民の町を思う気持ちは、形は違えど共通点がないわけではない。それは、「マチ」としての地頭町の地位が薄れ行く様を憂う気持ちである。都市計画により、ここ1、2年のあいだに新しい家が建ったりしてはいるが、彼女達は異口同音に「遅い」といつてる。そういった、自分の住む町を思う気持ちを一つにしてゆくことが、相互理解の糸口になるのでは、と思う。